

全身麻酔とワクチン接種

1. 生ワクチン接種後3週間（接種日を0日とする）、不活性化ワクチン接種後2日間の手術までの猶予期間をおく。ただし、心臓血管外科手術など侵襲の大きな手術を実施する場合、生ワクチンは接種後4週間の猶予期間をおく。
2. ワクチンによる副作用が起こりうる時期は、副作用が増強する可能性があり延期する。
3. 猶予期間をおかず手術を実施する場合、特に副反応が現れる時期に手術を実施する場合、患者本人もしくは親権者に危険性を十分説明し、同意を得たうえで行う。
4. 緊急手術はこの限りではない（説明と同意の取得は行う）。
5. 手術後の接種は、ワクチンの種類に関わらず1週間後より可能とする。ただし、生ワクチンに限り、周術期に輸血を実施した場合は手術3カ月後、 γ グロブリン投与を実施した場合は手術6か月後より接種可能ですが、大量輸血・大量 γ グロブリン投与を実施した場合はご相談下さい。

補足

- ① 生ワクチン：麻疹 風疹 麻疹風疹混合 BCG 流行性耳下腺炎 水痘 ロタ
不活性化ワクチン：ヒブ 三種混合 四種混合 日本脳炎 インフルエンザ
B型肝炎 肺炎球菌 ヒトパピローマウイルス ポリオ
- ② 副反応発生時期の目安：
生ワクチン：接種後14-21日以内 不活性化ワクチン：接種後2日以内
- ③ 手術・麻酔と予防接種の関連についての明確な医学的根拠はない。しかし、ワクチンにより抗体を産生すべき時期に、手術や麻酔により免疫が抑制されることで抗体の産生が不十分となる可能性がある。また、ワクチンによる発熱や痙攣などの副反応がおこる時期に手術や麻酔を行うことで、副反応の増強や生ワクチンによる感染症の発症が生じる可能性があり、副反応がみられる期間は手術を延期する。侵襲の大きい手術を実施する場合は、輸血・ γ グロブリン投与等により、ワクチン効果が落ちる可能性があるため、生ワクチン接種後4週間の猶予期間を手術前におく。

参考文献：

1. 溝渕知司, 香川哲郎, 鹿原史寿子ほか: 臨床小児麻酔ハンドブック 改訂第4版. 診断と治療社, 2019.
2. 稲垣喜三: 周術期の感染症—麻酔科術前診察で注意する感染症—. 日臨麻会誌 37: 674-80, 2017.
3. Siebert J, Posfay-Barbe K, Habre W, et al. : Influence of anesthesia on immune responses and its effect on vaccination in children: review of evidence. *Pediatr Anaesth* 17: 410-20, 2007.